論　文

明治の漢文笑話集『文明笑話』考

程　茗

A study on *Bunmei shōwa* in the Meiji period

CHENG, Ming

Abstract

Since the mid-18th-century, translations and interpretations of joke collections during the Ming and Qing Dynasties, as well as the creation of jokes written in classical Chinese, have been all the rage among the Japanese scholars who studied classical Chinese in the Kyoto-Osaka region, the influence of which lasted until the early 20th century. In the Edo period, the collection of classical Chinese jokes is usually discussed in terms of its compilation intention, influence and creative features, such as *Yakujun Kaikō Shingo* and *Yakujun shōwa.* However, research on classical Chinese joke collections is not deep enough in the Meiji period, especially the *Bunmei shōwa.* This paper focuses on the *Bunmei shōwa* compiled by Fujita Hisamichi in the early Meiji period, exploring its compilation intent, the sources and features of the jokes, and the nature of the humour. Based on the contents of the preface and introduction, it is apparent that the compilation intent of the *Bunmei shōwa* is to create a playful attitude and emphasize the entertainment of jokes. The jokes in the *Bunmei shōwa* are not only related to the jokes in *Xiao Fu* and *Xiaolin Guangji* of classical Chinese joke collections, *Dongpo Zhilin* and *Wuzazu* of essays but also *"Jumonji"* and *"Rōnin"* of the Edo brief jokes and *Yakujyun shōwa.* Meanwhile, the *Bunmei shōwa* inherits and develops the creative features of modern Japanese-style jokes written by the classical Chinese, which contain Chinese elements such as Chinese classical characters and allusions, and widely use unique language games in Japanese and Japanese elements that reflect the Japanese historical and cultural background. Besides, based on the "Bunmei-kaka" under the background of the Meiji Restoration, the author created various jokes and widened the creative boundary of classical Chinese jokes. This paper also reveals the structural characteristics of the jokes in the *Bunmei shōwa*, which is that the Chinese elements familiar to Japanese readers constitute the background of the jokes. In contrast, the Japanese elements achieve the core "laugh" effect.

Keywords: Classical Chinese jokes collections, Chinese literature, Meiji period, Bunmei-kaka

要旨

十八世紀中葉以来，明清笑話集の訳解と漢文体笑話の創作が京阪を中心とした唐話学者の間で一世を風靡し，その影響は二十世紀初頭まで続いている。『訳準開口新語』や『訳準笑話』など，江戸期における漢文体笑話集については，その編纂意図，笑話の影響関係及び創作特徴の面から論じられているが，明治期における漢文体笑話集，特に『文明笑話』に関する研究が十分に及んでいない。本稿は藤田久道によって編纂された明治初期の漢文体笑話集『文明笑話』を取り上げ，その編纂意図，笑話の出典と特徴及び笑いの質を検討する。序と引の内容からみると，本書の編纂意図は遊び

心で笑話を創作するとして娯楽性を強調しているということがわかった。本書には笑話集『笑府』，『笑林広記』と随筆集『東坡志林』『五雑組』の笑話など，江戸小咄の「十文字」「浪人」と漢文体笑話集『訳準笑話』の笑話と影響関係がある。同時に，本書は近世日本における漢文体笑話の創作特徴を継承・発展して，笑話には中国古典の人物や名句など中国的な要素だけでなく，日本語の独特な言語遊戯や日本の歴史と文化を反映する日本的な要素も頻繁に活用している。また，明治維新による文明開化を題材に，様々なジャンルの笑話を創作しており，漢文体笑話の創作の境界を広げているのが本書の特徴である。日本読者に熟知されている中国的な要素は笑話の背景を構築する一方，日本的な要素は核となる「オチ」の効果を果たしているという『文明笑話』の笑話の構造的特徴を明らかにした。

キーワード：漢文笑話集，漢文学，明治期，文明開化

1. はじめに

江戸時代中期，長崎経由で明清小説とともに『笑府』『笑林広記』が次々と舶来し，唐話学者の紹介と訳解による唐話学習ブームが起こり，舶来笑話集の翻訳・翻案が寛延期から明和期にかけて隆盛を極める。漢文笑話の嚆矢である岡白駒の『訳準開口新語』が寛延四年（1751）に世に出た。翌年には，松忠敦が訳解する『鶏窓解頤（『開口新話』の改題）』に出版された。宝暦五年（1755）には，都賀庭鐘訓訳の和刻本『開巻一笑』（明・李卓吾）も刊行された。これらの作品は漢文体笑話集の創作と出版ブームを引き起こし，出版は明和期に最も盛り上がり見せ，明治前期まで続いた[1]。

漢文体笑話の取材と創作のあり方について，石崎又造は「漢文の笑話なるもの，全然創作に成るといふ様なものは極めて少なく，支那笑話の改作か或は民間の俗伝或は古笑話の翻案に過ぎないものが多い」[2]と指摘している。すなわち，漢文体笑話の取材源には「①中国笑話，②民話，③古笑話」の三つあり，その特徴はほぼ先行笑話と民話の改作・翻訳であり，独創笑話が極めて少ないということである。また，磯部祐子は石崎又造の先行研究を踏まえて，「④独創笑話」の角度から『訳準開口新語』の特徴について考察し，「A. 中国人に仮託した話，B. 中国書籍の語句を用いた話，C. 日本文化を反映する独自な短い話，D. 故事性の濃厚な長い話，E. 中国笑話と発想を同じくする話」という特徴が五つあるとする[3]。

本稿は以上の江戸期における漢文体笑話集の創作特徴に加え，「評語付きの笑話」を考察し，明治初期の漢文体笑話集『文明笑話』と中国及び近世日本における先行笑話集との影響関係と創作特徴を明らかにするものである。研究方法としては，まず，『文明笑話』の書誌情報を整理

1　『噺本大系』や『日本漢文小説叢刊』によると，江戸期には漢文で創作した笑話集が14種あるということである。刊行された年代順に並べると，以下のようになる（括弧内は刊行年）。『訳準開口新語』（1751），『笑話出思録』（1755），『巷談奇叢』（1768），『前戯録』（1770），『善謔隨訳』（1775），『青眼餘言』（1794頃），『胡盧百転』（1797），『笑堂福聚』（1804），『花間笑語』（1808頃），『解頤譚』（1813），『囸談』（1824），『訳準笑話』（1824），『如是我聞』（1830–1843），『奇談新編』（1844）。また，『明治漢文笑話本集成：全九種』によると，明治以降に出版された漢文笑話集と訓読体の和文笑話集には以下の９種があるということである。『文明笑話』（1878），『明治笑府』（1880），『抱腹奇語』（1880），『珍々文鈔』（1880），『笑文選』（1880），『明治開口新語』（1880），『開巻百笑』（1887），『寒燈夜話』（1915），『解頤資談』（1938）。

2　石崎又造（1940）『近世日本に於ける支那俗語文学史』弘文堂，p321。

3　磯部祐子（2010）「漢文笑話『訳準開口新語』について」富山大学人文学部紀要，53号，p77–101。

し，その序と引から本書の編纂意図を検討する。次に，本書と中日の先行笑話集・古典籍との比較を行って，笑話の出典と頻繁に登場する漢語と典故など，中国の歴史と文化を反映する中国的要素，及び和語，日本の歴史と文化を反映する日本的要素を整理する。その際，中国の『歴代笑話集』や『歴代笑話集続篇』など，『噺本大系』に収録された日本の笑話集などを参考にする。最後に，日中の文化比較という観点で，本書の「笑いの質」を検討する。

2.『文明笑話』の書誌情報と編纂意図について

『文明笑話』は，藤田久道[4]の著。一冊。見返しに「明治十一年二月刻成／言梁藤田久道著／文明笑話　全／東京　耕文堂藏」とある。本文の前に，題辞，「序」，「文明笑話引」と「文明笑話目録」がある。半葉有界八行，一行十八字である。漢文で書かれ，左訓・訓点を付している。本書は書名のとおり明治維新後の文明開化を背景として創作された全四十七話の笑話集で，笑話の形式は多く対話を主とし，その登場人物は人間を主にして，「手と足」や「梅と蘭」などの擬人化した事物も見られるが，その関係は「親子」や「貸し手と借り手」などの単純な図式で，背景についての描写は多くなく，結末の一言がいわゆる「オチ」となっている。

『文明笑話』の序と引には著者の編纂意図が垣間見える。次の松本萬年[5]と島田仙州[6]による序文を見てみよう。

> **（ア）蔽牛之樹**，**（イ）浮江之瓠**，自無而有，竒幻百出，**（ウ）無有涯際**，可謂言之入妙者也。若此笑話，固非色形争辨之言，劈空閃影，無跡之可指焉。披之輙教人咭咭而無有可罵可嘲也，亦非言之妙者耶。他日次篇續續，竒幻百出，無有涯際也，讀者應果叫妙耳。[7]

文中の下線部（ア）「蔽牛之樹」，（イ）「浮江之瓠」や（ウ）「無有涯際」は，いずれも『荘子』の「人間世」と「逍遙遊」の物語に由来する言葉で，笑話の創作には，荘子のいわゆる「寓言」のように豊かな想像力と誇張された独特の芸術的な特徴が重要であることを述べる。従って，本書の編纂意図は，「大塊茫茫，流光瞬息，而其間覆雨飜雲，錯互變滅，幾令天地為之戚容，河山為之黯色。〔中略〕則又往往襲曼倩之詼諧，学荘周之隠語，清言傾四座，非徒貌晉人之

4　国立国会図書館デジタルコレクションの調査によると，藤田久道，生没年不詳，号言梁，長野縣士族。彼の著作編集したものは多数ある。①和解漢籍：『三体書牘大成』（1878），『尺牘粋金』（1878），清・虞学圃著の『江湖尺牘』による。②歴史：『漢文内国史略』（1879），『十八史略：漢土歴代』（1879），『漢土歴代二十一史略』（1879），『漢文日本略史』（1881），『漢文日本略史字引』（1882），『漢文内国史略字引』（1882）。③学習書：『初学作文法心得』（1880），『初学文話』（1880）。④経済：『家事經濟論』（1882）。翻訳，歴史，作文，経済など，前述した著作の分野は多岐にわたるが，藤田久道が常に漢語の文学創作と翻訳に重点を置いていることは明らかである。

5　安岡昭男（2010）『幕末維新大人名事典（下巻）』新人物往来社，p492。松本萬年〔文化12・８・25－明治13・９・18（1815–1880）〕医師・漢学者。名は政秀。武蔵秩父郡大宮郷松本佐団次長男。江戸で寺門静軒に学び，帰郷後医業の傍ら子弟の教育にあたる。その間井上如常らと幕政を論議し意見を建白。慶応３年招かれて幡羅郡妻沼村で教鞭をとる。明治８年東京師範学校教授となり，また止敬学舎を設立して女子教育にあたる。後年の女医荻野吟子はその第１期生。墓は東京都台東区谷中天王寺墓地。（清水隆）

6　北佐久郡志編纂会編（1957）『北佐久郡志第四巻（研究調査篇）』北佐久郡志編纂会，p253。島田仙州。幼名均，通称栄之進，号仙州。天保７年－明治23年12月７日，享年55。書画家。

7　国立国会図書館蔵『文明笑話』序丁目表・序丁目裏による。

風味，實深有激乎其中，而聊借玩世〔後略〕」[8] という『笑林広記』の序文と類似して，遊び心で笑話を創作するとして娯楽性を強調している。また，序文の「披之輙教人咭咭而無有可罵可嘲也，亦非言之妙者耶」はこの本を開くと，人を笑わして，罵ったりからかったりすることがなく，笑話の言葉が巧妙であると言うほかないとして，本書収録の笑話を評価する。次に著者による「文明笑話引」を見てみよう。

> 春来二竪作レ祟，荏苒在二病褥一者殆二閲月。無聊之餘，唯與二睡魔一為レ讐。**（ア）一夕偶見下児輩之於二燈下一，軼説二笑話一，嘻嘻相調謔上，有二頗慰二病欝一**。因睡餘採下録其所レ聞，稍可レ當二破顔一者上，**（イ）以聊消レ閑**，遂集成二一小冊一，名曰二文明笑話一。亦唯病中燈下之児戯，**（ウ）要不レ過下一時為中驅二睡魔一之一助上耳**。[9]

この「文明笑話引」では，次の三つのことを言っている。一つは著者の編纂の契機である。下線部（ア）のように，著者は夕方に偶然子供たちが明かりの下でお互いに笑話を語ってふざけあう様子を見て，病気の憂鬱さがなぐさめられたことを記す。つづく下線部（イ）「以聊消レ閑（暇潰しに）」，（ウ）「驅二睡魔一（睡魔を追い払う）」は編纂の目的であろう。そして最後に著者が「文明笑話」と名付けたのは，笑話の題材が子供たちから聞いた話だけでなく，文明開化の面白い話を含むからである。本書は漢文体笑話集として中日の先行笑話とどのような影響関係があるのかを中心に，以下で検討しよう。

3.『文明笑話』における中国的な要素

本書は，江戸期の漢文体笑話集の作法を踏襲して，中国笑話の着想を活用して作った話だけでなく，中国古典の滑稽話から着想を得て，再創作している話もある。また，笑話には中国古典からの引用や文化的なイメージが複数見られる（附表参照）。同時に，本書には第一話「吃醋」，第十三話「叱咤」，第二十七話「濟度」には，それぞれ話の後に「諧史氏曰」という書き出しの評語がある。評語の機能の検討とともに，中国の古典籍と笑話集との比較を通じて，本書の四十七話の中で，第三話「碎窑」が『笑府』「売鍋」[10]，第三十四話「四脚」が『笑林広記』「鋪兵」[11] の発想から改作した話であるということを明らかにする。次の中国笑話の翻案の一例を見てみよう。

> 賣鍋者必以鍋底擲地作聲，以明無損。一人偶擲地而破，謂人曰，如此等鍋，就不賣與你了。
>
> 『笑府』巻十三・閨語部・賣鍋

> 一-賈-人(/アキンド)販(ヒサ)二ク窑(トウ)器(キ)(/セトモノ)一ヲ。有二リ求レ(ムルカ)買(ンコトヲ)者一ノ，就レテ中ニ擇二ミ取

8　京都大学附属図書館蔵『(新鐫) 笑林広記』(清・遊戯主人) の序文による。

9　国立国会図書館蔵『文明笑話』序１丁目表・「文明笑話引」による。

10　国立公文書館内閣文庫蔵『笑府』(明・馮夢龍) 巻13・閨語部・「売鍋」による。

11　京都大学附属図書館蔵『(新鐫) 笑林広記』(清・遊戯主人) 巻５・殊稟部・「鋪兵」による。鋪司遞緊急公文，官恐其遲，撥一馬騎之。其人赶馬而行，人問其，如此急事，何不乘馬。答曰，六隻脚走，豈不快如四隻。

(/エリドリ)テ一-器ヲ以テ問ト レフ價(/ネダン)ヲ。賈-人曰ク，若干(/ソコハク)銀ナリ。曰ク，不廉(/タカイ)ナリ，少シク減(/ヒイテヲケ)セヨ。曰ク，這レ等(/コノヨウナ)ノ好-器(/ヨキシナ)，如イカ-何ンソ得レン然(/ソウハナラス)コトヲ，遂ニ将マサ(/ス)ニ収オサ下メ器-物(/シナモノ)上ヲ去ント，偶々失シテレ手(/テハヅシ)ヲ墮レツ地ニ，忽チ碎サイ破ハ(/クダケタリ)シ了ル。其ノ人ト見テレ之ヲ曰ク，嗚ア呼ヽ，此ノ器若ク レ此ノ，能ク早ク碎サイ-破ハスル哉カナ(/ヂキニワレルデアル)。買(/カツテ)コトモレ之ヲ奚ナンスレソ為(/ナニセン)。

『文明笑話』・第三話・碎窖

「売鍋」は『笑府』巻十三閨語部に収録されている話で，江戸時代から日本に広く翻訳・翻案されてきた笑話である。武藤禎夫と磯部祐子の考証によれば，『気のくすり』「鍋屋」[12]と『訳準開口新語』「第七十話」[13]はそれぞれ「売鍋」の翻訳話と翻案話であるということである。「碎窖」の由来について，「売鍋」に直接的に取材して改作するのか，あるいは既に江戸期に刊行された小咄本と漢文笑話集の類話を参考にして改作するのか，明確な判断を下せないが，話の設定や構想に原作の面影が残っている。原作が極めて簡潔な話構成と台詞であるのに対し，著者の脚色では，売り手と買い手の駆け引きの細部を追加し，登場人物の心理をより詳細に描写している。こうした笑話は通常，単純明快で，特定の文化的な背景知識に依存せず，広く理解される。本書の第三十四話「四脚」の「四脚(/シホンアシ)ニシテ而走ル，疾(/ハヤシ)ニシ于二-脚(/ニホンヨリ)ヨリ」は『笑林広記』巻五殊稟部「鋪兵」における「六隻脚走，豈不快如四隻」と同工異曲の話である。

本書には，中国笑話集に収録された笑話の翻案に加え，中国の文人による滑稽な随筆の改作も含まれている。例えば，本書の第三十七話「禁方」は随筆集『東坡志林』「記道人戯語」[14]と同じ発想の作品であると推測できる。

紹聖二年五月九日，都下有道人坐相國寺賣諸禁方，緘題其一曰，賣**(ア)「賭銭不輸方」**。**(イ)少年有博者**，以千金得之。歸，發視其方，曰，**(ウ)但止乞頭**。道人亦善鬻術矣，戯語得千金，然亦未嘗欺少年也。

『東坡志林』巻二・道釋・記道人戯語

有リニ賣ル下諸モロ々禁方(/マジナイ)上ヲ者ノ，皆ナ緘-封(/フヽジ)シテ題ニ書(/ウハガキ)ス於其ノ上ニ，其ノ一ツ題シテ曰ク，**(ア)積-財(/カネヲタメル)ノ方**ト。有リニ**(イ)貪人**タン(/ヨクバリ)ニ抛レ

12 武藤禎夫（1996）『江戸小咄類話辞典』東京堂出版，p134。「私が鍋は，請け合って上げます。これ，御覧じませ」と，両方の耳を持って投げて見せるに，割れず。幾度も投げて，「これ，この通りでござる」といふ時，鍋，さっと二つに割れる。「コレ，これをば上げませぬ」『気のくすり』・「鍋屋」・安永８。

13 国文学研究資料館蔵『訳準開口新語』・第70話による。商客荷ニテ瓦器ヲ過レ門ヲ，主翁呼テ問買ニ焙盆(/ホウロク)ヲ。商客出シメシ觀テ曰ク，此ヲ為ニ最精好ト，價百文。翁夫妻估(/ネウチ)シテ曰ク，不レ過ニ三十文ニ。商客艴然トシテ，不レシテ答而去。對(/ムカイ)隣ノ主人亦欲レ買ニ焙盆ヲ，乃出觀ス，估シテ欲レ買ニント之ヲ二十文ニ。商客大ニ怒，投ニス之ヲ擔中ニ，破ワレテ而為レル兩ト矣。向サキノ翁見テレ之ヲ曰ク，呀ア、。破レタリ矣。夫妻相目シテ曰ク，幸ニ不レ買レ之(/カハデヨカツタ)。

14 国文学研究資料館蔵『東坡志林』（宋・蘇軾）巻２・道釋・「記道人戯語」による。

テ錢ヲ買レヲ之ヲ歸レテ家ニ，發テ視ニレハ其ノ方ニヲ，則チ曰ク，（ウ）毎レニ得ニル一-錢ニヲ，輒チ深ク納ニメ筐（/ハコ）笥ニニ，至ニルモ餓ウヘテ而死ニルニ，亦タ謹テ勿ニクシテ使-用（/ツカフナ）ニスルコトト可ナリ也。

『文明笑話』・第三十七話・禁方

両者を比較すると，いずれも「禁方」をテーマとして選択し，その筋も大体同じであることがわかるが，下線部（ア）購入する禁方が「金を賭けて負けない方術」から「金を貯める方術」に，下線部（イ）笑話の主人公が「賭博の少年」から「欲張り」に変更される以外，両者のオチの設定はほぼ同じである。すなわち，下線部（ウ）のように，「いずれも大金をはたいて買った方術はただの冗談であり，秘策があるわけではない」ということである。第三十七話「禁方」が『東坡志林』「記道人戯語」に由来すると断定できないが，本書の著者は単純に中国の笑話を模倣するものに限らず，古典の滑稽話を参考にしたことは確かである。次に中国人に仮託した笑話の一例を見てみよう。

酒-客（/サケスキ）與ニ**（ア）登-徒-子（/イロゴノミ）**ニト宴（/サカモリス）ス。舉レテ杯ヲ先ツ勸スメニハ登-徒-子ニニ，登-徒-子量浅（/シユリヨウナシ）シ，僅僅（/ワツカニ）ニ嘗レメ之ヲ，一-杯未ニタ飲盡ニサ頃シハラクアツテ間，有ニリ一カ-婢ヒニ来テ侍レス酒ニ，頗ル有ニリ姿シ-色ク二，登-徒-子見レテ之ヲ，戀-情（/ハルコヽロ）輒チ頓ニハカニ發（/オコリ）シ，恍-惚（/ウツトリ）遽ニハカニ遺スワニルニ酬-醋（/サカモリ）ノ之事ニヲ，酒-客不レ耐レ渴（/ノドガヒツク）ニ，乃チ促ウナガレシテ杯ヲ曰ク，子何ナンスレソ為不レルニ醻（/ノミツクサヾル）セ，豈ニ不ニ太ハタ永（/アマリナガイ）ニカラ乎ヤ。**（イ）登-徒-子赧タン-然（/アカク）トシテ俄カニ指ヒトツ捫ニテ鼻毛ニヲ眎ミレテ之ヲ曰ク，咄咄（/コレハサテ），信トニ長シ，慚愧リンキ，慚-愧。**

『文明笑話』・第十七話・鼻毛

楚の文人である宋玉[15]が著した「登徒子好色賦」の主人公，登徒子を題材にした笑話である。無実の罪を着せられた宋玉が，登徒子から「好色」のレッテルを貼られ，やがて反撃に出るという話である。この結果，登徒子は「好色」の代名詞となり，この笑話はそれに仮託した話である。「登徒子好色賦」は日本にも古くから伝わっており，天平以前の『文選』所収「登徒子好色賦」まで遡ることができる。何暁毅の考証によれば，作者の宋玉と主人公の登徒子は，日本の文人や僧侶までもが書いた様々な漢詩や文章に頻繁に登場する。例えば，漢詩「奉和春閨怨」の主人公「怨婦」と妖怪画集『今昔百鬼拾遺』の鬼女「倩兮女」は，「登徒子好色賦」に描かれた東隣の絶世の美女に由来している[16]。「登徒子好色賦」の登場人物は長い間，広く一般に知られてきたのであり，このような背景から，下線部（ア）酒宴に出席した登徒子が，婢の美貌に欲情して友人たちと杯を交わすのを忘れ，酒を飲みたがっている他の人々の焦りを誘うという，本話の諧謔が生まれたのであろう。この笑話のオチは，下線部（イ）登徒子が鼻毛を抜いて，「さすがに長い」と照れながら言ったことである。日本語では「鼻毛が長い」は好色を表す

[15] 日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典第二版』（第八巻）小学館，p231。【宋玉】中国，戦国時代末の楚の文人。鄢（湖北省宜城）の人。作品に「九弁」「高唐賦」「神女賦」などがあり，形式，内容ともに屈原の継承者とされる。平安朝では宋生・宋大夫とも記される。生没年不詳。

[16] 何暁毅（2017）「『登徒子好色賦』在日本的流行及影響」長江大学学報（社会科学版）巻40，２号，p21–26。

諺なので，この物語の「好色」の主題と呼応している。

『文明笑話』は，中国の笑話集に掲載されている笑話のアイデアを再創作に利用するだけでなく，中国の書物から多くの引用や特徴を笑話に利用している。次に中国古典の語句を引用した話の一例を見てみよう。

> 俗謂テ酒人(/サケノミ)ヲ曰フ左利(/ヒダリキヽ)ト。**(ア)有リ兄-弟(/キヤウダイ)鬩(セメ)レク牆(カキ)(/ケンクハ)ニ者**，隣-翁(/トナリノオヂ)往(ユイ)テ諭(サト)レシテ之曰ク，**(イ)兄-弟者譬(タトヘ)ハ如シ左-右ノ手**ノ，**(ウ)骨肉(コツニク)(/ミウチドシ)相ヒ傷(ヤフル)**，何ノ益カ之レ有シ。子-等(/オマヘタチ)盍(ナンゾ)(/ザル)レ思ハ焉。兄ノ曰ク，敬テ領ス明-教(/ゴイケン)ヲ，但タ不レ知ラ兄弟如(コトクンバ)左-右ノ手ノ，則チ我レ當(/ヘキ)ニ右-手(/ミキカ)ナル歟(カ)，将タ左手(/ヒダリカ)歟。弟遽(ニハカ)ニ應(コタヘ)テ言フ，兄ハ固(モトヨリ)左手ニシテ，而シテ我レ右-手也リ。隣翁問フ以レテ何ヲ分ツト。曰ク，阿兄(/アニキハ)ハ則チ善ク飲(/ジヨウゴ)ム，我レハ**(エ)蕉葉量(シヤウヨウリヤウ)(/カラゲコ)**。
>
> 『文明笑話』・第二話・左手

この笑話には中国古典籍の引用が二つある。一つは下線部（ア）の部分で，『詩経』小雅・「棠棣」の「兄弟鬩于牆，外禦其務」であり，もう一つは下線部（イ）で『三国志』魏志・王修伝の「夫兄弟者，左右手也」である。前者は，兄弟は家では喧嘩をするが，団結して侮辱から身を守ることができるということを表している。後者は，兄弟間の重要性を人の左右の手のように示している。いずれも内部で意見の相違があるが，外敵に対しては団結できることを伝えている。さらに，この笑話には下線部（ウ）「骨肉相傷」と（エ）「蕉葉」という二つの熟語も含まれている。「骨肉相傷」は身内同士で傷つけ合うことを比喩している。「蕉葉」は底が浅くて小さな杯を意味する。例えば，「雪夜與師是棋次前韻詩」（宋・陳造）には「掀髯得一笑，為汝做蕉葉」とある。本話は兄弟間の対立を背景にして，原典と同じ意味を伝えている。話の転換点は，兄弟二人が隣人の老人の助言を誤解するところで，ここから笑いを生み出している。なぜ兄弟の誤解を誘発するかというと，日本語の「左利」には二つの意味があり，一つは左手を上手に使う人，もう一つは酒好きの人であり，漢語ではそうではないからである。このことは，笑話に登場する四書五経や『三国志』といった中国の古典が日本の知識人の間で知識の基盤となっており，これを背景に作者は大胆に「左利」や「上戸」など，日本語独特の言葉を作品に盛り込み，笑話を作り上げたのである。

> 有リ蕩子(トウシ)(/ハウトウムスコ)ヲ，遊ビ**(ア)北-里**(/クルワ)ノ小-樓(/コミセ)ニ，買フ**(イ)瘦-馬**(/ヤスオヤマ)ヲ，遂ニ得ル悪疾(/ワルキヤマイ)ヲ，壊シ了ス鼻-梁(/ハナハシラカクツタ)ヲ。後チ與ニ諸-友(/トモタチ)ヲ相携(/ツレタチテ)テ，又タ之ク北-里ニ，適(タマ)々遇フ其ノ婦(/オヤマニ)ニ于途(/トチウニ)ニ，乃チ指シテ謂テ其ノ友ニ曰ク，此レ吾カ鼻-祖(ビソ)也(/ハナノオヤジヤ)リ。諸-友為レニ之カ嘆-息ス。嗚呼，世(セ)-間(ケンナニ)何-等(ラ)ノ事カ無レシ對(/ツイノコト)，此レ與ニ**(ウ)五-雑組**ニ所レル謂風ノ之始メ也ト相(アイ)類ス。
>
> 『文明笑話』・第十一話・瘦馬

下線部（ア）北里[17]，（イ）瘦馬[18]の言葉や（ウ）『五雑組』の説話を踏まえた笑話である。「嗚呼，世間何等の事が對に無ん。此れ五雑組にいわゆる風の始めなると相類す」と放蕩息子が遊女を「鼻祖」と呼ぶことに対する友人たちの嘆息が，この笑話を解釈する鍵になる。放蕩息子が遊女を「鼻祖」と呼ぶのは，一方では遊女が彼の鼻に感染した悪病の「元凶」であり，他方ではこの遊女が彼の女郎買いの習慣に染まる「発端」でもあるからである。悪病に罹った後も友人たちと遊里へ通うことに拘ることからも，主人公のどうしても悔い改めない性格が窺える。また，「此れ五雑組にいわゆる風の始めなると相類す」は，明朝末期に全国で遊女をあげて遊ぶ風潮が盛んになることを指すのである。『五雑組』には，この風潮が一部の大都市で盛んになっただけでなく，辺鄙で荒れ果てた貧しい田舎にも広がったことが詳細に記録され[19]，また，「瘦馬」を代表とする揚州及び中国各地の遊女の特徴も記録されている。『五雑組』には，読書から得た洞察や事実の分析，政治や時事問題，地方事情の記録など，社会的・人間的な側面を幅広く網羅し，滑稽な物語も多く含まれている。そのため，この本が日本に輸入された後，日本の笑話の創作にも一定の影響を与えた。例えば，武藤禎夫は落語「饅頭怖い」の原話は『五雑組』と『笑府』にあると指摘している[20]。本書の第二十九話「児夢」も「北里」を題材とした笑話である。

また，本書には第一話「吃醋」，第十三話「叱咤」，第二十七話「濟度」それぞれ話の後に「諧史氏曰」という書き出しの評語がある。「諧史氏」の由来についてはいくつかの可能性がある。中国の宋・沈淑と明・江盈科はいずれも「諧史」を笑話集の書名として使っている。笑話集に因んで設定した可能性もある。一方，『史記』「太史公曰」と音が類似するので，『史記』の評を意識した可能性もある。いずれにしても，中国笑話集の伝統にもある評語を利用しているわけだが，笑話本体と作者の評語とはいかなる関係・機能があるのか。次の評語付きの笑話の例を見てみよう。

子(/ムスコ)與レ人争フ悪-口(/アクタイツク)。罵-詈ス。其ノ父来リ叱テ曰ク，咄，這ノ餓鬼，你チ畜生，吾レ常ニ誡レム你ヲ，口勿レレ出ニ悪言(/アクタイツクナ)一ヲ，你チ盍(/ル)レソ慎マ焉。

(ア)諧史氏曰ク，子ハ為レメニ父ノ罵，父モ亦タ為レメニ子ノ罵ル。

『文明笑話』・第十三話・叱咤

17　国立公文書館内閣文庫蔵『唐代叢書』第14冊所収『北里志』（唐・孫棨）・「海論三曲中事」による。平康里入北門，東回三曲，即諸妓所居之聚也。

18　国立国会図書館蔵『五雑組』（明・謝肇淛）巻８・人部４による。維揚居天地之中，川澤秀媚，故女子多美麗，而性情温柔，舉止婉慧。所謂澤氣多，女亦其靈淑之氣所鐘，諸方不能敵也。然揚人習以此為奇貨，市販各處童女，加意裝束，教以書，算，琴，棋之屬，以徼厚直，謂之「瘦馬」。然習與性成，與親生者亦無別矣。古稱燕，趙多佳人，今殊不爾。燕無論已，山右雖纖白足小，無奈其獷性何。大同婦女，姝麗而多戀土重遷，蓋猶然京師之習也。此外則清源，金陵，姑蘇，臨安，荊州及吾閩之建陽，興化，皆擅國色之鄉，而瑕瑜不掩，要在人之所遇而已。

19　同上。今時娼妓布滿天下，其大都會之地動以千百計，其它窮州僻邑，在在有之，終日倚門獻笑，賣淫為活，生計至此，亦可憐矣。

20　武藤禎夫（1996）『江戸小咄類話事典』東京堂出版，p140。

子供が人を罵ったことを知った父もまた子供を叱って罵る。笑話の裏に「蛙の子は蛙」という寓意が潜んでいる。本話の評語の下線部（ア）「子為父罵，父為子罵。（子は父の為に罵り，父もまた子の為に罵る。）」は，子供は父親のために罵る習慣を身につけ，父もまた子供が罵ることを好むために罵るということを意味する。『論語』子路篇には，「父為子隠，子為父隠。（父は子の為に隠し，子は父の為に隠す。）」という諺がある。父は子供のために罪を庇って隠し，子供は父のために罪を庇って隠すという意味である。評語の構文は『論語』子路篇に由来する諺と全く同じであるから，それに基づいて改作したものであろう。文の順序と意味が原典と全く変わったが，その文体と韻律は一致しているから，『論語』子路篇を熟知している読者にとっては，このパロディーのような評語からすぐに原典を連想し，笑話の滑稽さを味わうのである。また，中国の笑話集中には本話のストーリーと類似するものが少なくない。例えば，『笑府』『精選雅笑』『笑得好』「抬枝柴」と『笑林広記』はいずれも類話「劈柴（柴刈り）」だけではなく，小咄本『太郎花』はその翻案話「喧嘩」[21]を載せている。注目されるのは，『精選雅笑』の酔月子による評語である。

父子同劈柴，父執柯，誤傷子指。子罵，老烏龜，汝瞎眼耶。孫在傍見祖被罵，大不平，曰，射娘賊，父親可是罵得的。

（イ）屋檐水，点滴不差。正是：孝順還生孝順子，忤逆還生忤逆兒。

『精選雅笑』・劈柴[22]

父が祖父を罵ったのを聞いた孫はまた父を罵るという話の構成は以上の笑話とほぼ同じであるが，酔月子は「劈柴」の評語の下線部（イ）で，まず「屋檐水，点滴不差。（軒先の水滴は水滴の後を追い，水滴は少しもずれることなく同じ場所に落ちる。）」という諺を使用し，次に「正是，孝順還生孝順子，忤逆還生忤逆兒。（親孝行であれば子孫もそれに倣い，親不孝であれば子孫もそれに倣うのである）」という教訓的解説をつけている。読者に笑話の裏に潜んでいる寓意を指摘する酔月子に対し，『文明笑話』では笑話そのものの滑稽味を増幅するような冷めた評語を与えている。本話と同じように，第二十七話「濟度」では，著者が「好色な和尚は世の中の衆生（衆娘の音読みが同じ）を済度したい」という話に，「諧史氏曰く，此の僧果して能く其の言の如くんば，則ち無量功德，琉璃光佛の法筏に勝る萬萬かな」という評をつける。評語は笑話の後を受けて冷ややかな態度で破戒僧を皮肉る機能を果たしている。第一話「吃醋」も日本語の擬音語を題材とした笑話なので，次節で詳しく検討する。本書の評語は，形式上で中国古典籍と笑話集の「諧史氏曰」という形を継承し，内容上で評語が笑話の内容を引き継ぎ，さらに揶揄する役割を果たしているのである。

本書所載の笑話には，明清笑話集『笑府』『笑林広記』や随筆集『東坡志林』『五雑組』中の

[21] 松枝茂夫・武藤禎夫編訳（1964）『中国笑話選：江戸小咄との交わり』平凡社，p157。「喧嘩」親子喧嘩をする。亭主が「このおいぼれの役立たず，死にさがりのばかおやぢ」と悪態をつけば，孫がききかねて，うしろから我が親をくらはせながら「このいけぬすっと。現在の親に向ひ悪態をつくものがどこの国にあるものか」

[22] 王利器（1956）『歴代笑話集』上海古籍出版社，p391。

滑稽話を翻案したものだけでなく，中国の人，物や事などを題材に創作したものも含まれている。そうした笑話には日本人に馴染み深い白話語彙や中国古典からの引用やイメージが多く見られる。本書は，江戸時代に先行した漢文体笑話の創作方法を継承しているが，中国笑話の筋をそのまま模倣しているわけではない。元々単純な構造や簡潔な対話であった中国笑話より，日本読者の共感を得るために，作者は話の不自然な部分を弱めたり，詳細な筋や登場人物の心理描写を追加する。さらには三話の評語が笑話の内容を引き継いで笑いを増幅させる。このように，明治初期に刊行された『文明笑話』は，中国笑話集や近世日本の漢文体笑話集を継承・発展させたものであったことがわかる。また，笑話の中に頻繁に登場する中国要素は，物語の背景を構築するために用いられており，作者は，一方では自らの漢学素養を誇示するために，他方では見聞きした中国の興味深い話や伝説を紹介・記録し，日本の読者が中国の歴史や文化などの内容を広く理解できるようにするために，これらの素材を作品に取り入れたのである。要するに，これらの文化要素は，読者が笑話の裏にある文化的な雰囲気を理解することができるまで日本で流布していたことがわかる。

4.『文明笑話』における日本的な要素

先述の通り，『訳準開口新語』や『訳準笑話』など江戸期における漢文体笑話集の創作意図を継承し，本書には直接的に中国笑話集・古典籍の滑稽な内容を吸収して改作する笑話があり，「登徒子」や「北里」,「瘦馬」などの文化的なイメージの借用によって創作する笑話もある。また，本書は漢文体笑話集であるが，江戸小咄の漢訳と日本の先行漢文体笑話の同想話や改作話がある（附表参照）。例えば，本書の第十六話「割道」は江戸小咄「浪人」と「十文字」のプロットを融合・脚色した漢訳であり[23]，第四十四話「問歌」は『訳準笑話』第二話の改作でもあると考えられる。本書の笑話は，日本の小咄本，笑話集や漢文体笑話集など先行笑話の内容を参考に活用したものに加え，日本語の言語遊戯や日本の歴史と文化を題材にしたもの，文明開化ならではの事象を題材にした様々なジャンルのものなど，日本的な要素も数多く含まれている。全体的には，中国的な要素を背景に，日本的な要素をオチに使用しているのが本書の特徴の一つである。日本語の言語遊戯には，早口言葉，なぞなぞ，尻取り，洒落，はさみ言葉，さかさ言葉などがある。本書には，方言（俗語），擬音語やダジャレなどが頻繁に使用された。漢文は物語の背景で表現しながら，日本語の発音や語意を利用したユーモアを創り出すことが特徴的である。次の日本語の俗語を利用した笑話を見てみよう。

主人(/アルジ)與(ト)レ客ク對-坐(/ムカイオル)ス。有レリ蝨(/シラミ)ミ緣(ヨル)ニ客ノ衣領(イリヤウ)(/エリ)ニ，主-人存ニスル躰-面(/グハイブンヲツクラフ)ヲ，陽(イツハリテ)為レス不レルヲ知(/シラヌフリシテ)ニラ其為レルヲ蝨ミ，乃チ告レテ之レニ曰ク，子(/オマヘノ)ノ之領(エリ)有レリ蟲(ムシ)。客曰ク，何蟲(/ナンノムシゾ)ソ。

[23] 本書の第16話「割道」は「切腹で借金取りを脅かす浪人」をテーマにしており，「腹に墨で十字を切る」というプロットも含まれている。筆者の調査によれば，「切腹で借金取りを脅かす浪人」をテーマとした小咄には，『坐笑産』（安永２年）「浪人」があり，「腹に十文字を墨打ちをする」をプロットとした小咄には，『軽口浮瓢箪』（寛延４年）「十文字の墨打」，『坐笑産』「十文字」と『高笑い』（安永５年）「息子」などある。従って，本書の著者は，同時に「浪人」と「十文字」を収録した『坐笑産』を参考に，第16話「割道」を創作した可能性が高いと考えられる。

曰ク，（ア）大サ如レシ蚤（/ノミ）ノ。然ラハ則チ豈ニ虱ミ耶カ（/シラミデハナイカ）。曰ク，（イ）虱ハ則チ我レ不レル知レ之也。縁ニ子ノ之ヨリ領ニ者，（ウ）只タ是（/コレハ）レ似リ千手観音ニ耳。〔方言ニ謂レテ虱曰ニ千手観音ト，未レタ知ニ何ノ義ニ。〕

『文明笑話』・第五話・領蝨

虱の印象について，『新撰狂歌集』[24]には「虱ほど世にへつらはぬものはなし貧なる者になほも近づく」という狂歌がある。また，虱と蚤について，「虱は貧乏人に，蚤は金持ちにつく」という諺もある。虱には貧乏人にしかつかないという悪いイメージがある。そのため，表立って虱のいることを指摘するのは避けられるようになったのだろう。この笑話では，主人が客の襟に虱がついているのを発見しても，客の面目を保つためにに積極的に対応することはない。下線部（ア）「大きさ蚤の如し」，（イ）「虱は則ち我れ知らざるなり」と正直に虱がついているという答えを回避しようとする。しかし最後には下線部（ウ）「千手観音」のようだと，日本では直接虱のことを指す言葉を吐いてしまうのである。「虱」を「千手観音」と称するのは日本では古くからあり，「イヤおらが虱より此ふとんはどふやらうぢうぢ。千手観音はおらぬかや」という十八世紀の浄瑠璃『平仮名盛衰記』まで遡る[25]。虱の足が千手観音像に類似していることから，虱の隠語になったという説が一般的である[26]。従って，作者が笑話の最後に「方言に虱を謂ひて千手観音と曰ふ，未だ何の義たるかを知らず」と笑話を解釈するための説明を付け加えているが，作者は理に落ちるのを避けるためか，わざと語義（由来）がわからないとうそぶいている。このような本話と同じ発想の笑話には，『笑倒』「虱子」[27]と『醒睡笑』鈍副子第十三話[28]がある。また，本書には俗語に加え，日本語の擬音語を利用した笑話もある。次の一例を見てみよう。

二ニ猫ミヤウ（/ニヒキノネコ）咬（/カミアウ）ニム于屋上オク（/ヤネノウヘ）ニ。人ト見レテ之ヲ曰ク，二ニ猫不ニルモノ相ヒシラ識ニ者カ耶（/シルモノデナイカ）。何ソシカク爾相ヒキソフヤ競也。傍ハラノ人（/カタハラノヒト）ト曰ク，否イナ，非レス然ルニ，渠カレ蓋タシ伉儷コウレイ（/ツレアイ）ニシテ而吃レスル醋ス也（/リンキスルノジヤ）リ。其ノ人ト曰ク，異コトナル哉ナ（/カハツタコトナ）ナ。子何ヲ以テ知レル之ヲ。曰ク，其ノ競フヤ也。叫サケフニ（ア）夫フウ婦フ夫婦ト。

[24] 立教大学池袋図書館乱歩文庫蔵『新撰狂歌集』（寛永年間刊）による。

[25] 田中寛子（2013）「虱と千手観音：『梁塵秘抄』三四六歌，四一〇歌の関連をめぐって」日本歌謡研究53（0），p99–114。田中寛子は，浄瑠璃『平仮名盛衰記』の例により，千手観音を虱と称することがすでに定着していると指摘している。

[26] 皓星社編集部（2017）『新修隠語大辞典』皓星社，p424。【千手観音】虱のことをいふ。手が多くあつて千手観世音菩薩の御影によく似て居るからいつたもの。『かくし言葉の字引』（1929）

[27] 松枝茂夫・武藤禎夫編訳（1964）『中国笑話選：江戸小咄との交わり』平凡社，p237。「虱」ある男，友人の前でしらみを一匹つかまえ，体を作ろうと，わざと地上に捨てて，「ちょっ，しらみかと思ったら」という。友人悠々とそれを拾い上げてみてから，「なんだ，しらみじゃないのかと思ったら」。

[28] 安楽庵策伝著・鈴木棠三訳（1989）『醒睡笑：戦国の笑話』平凡社，p29。塔頭（山内の寺院。寺中）の僧が，途中で客と出あい，つれ立って帰った。小僧が出て来て，「ここの縁側に虱がいる」といった。坊主は目をして（メーとにらむ），「そのようなことを大声で言わぬものだ」と叱る。小僧はもう一度そばに行って，さきに虱と思った物をじっと見てから，坊主にむかい，「虱ではなかったです。わたくずが落ちたのだったです」と，小声でそっといった。しらみほど世をへつらわぬ物はなし貧なる者になおも近付く。

諧史氏曰ク，（イ）傍人開二テ冶長ノ之口一ヲ，而シテ吐二ク東方生ノ之言一ヲ，可レシ謂二フ兼才一ト。今マ憾レム逸二ルヲ其ノ姓氏一。

『文明笑話』・第一話・吃醋

猫は相手を威嚇する時に毛を逆立てて本能的に「フー」と鳴くことでよく知られている。この笑話では，二人が屋上で喧嘩をしている二匹の猫の関係について話し合っていて，一人が猫の鳴き声だけで，彼らが嫉妬深い夫婦だと判断する根拠は，日本語では猫の鳴き声を模倣した擬音語「フーフー」と下線部（ア）「夫婦（ふうふ）」の音との類似にある。この荒唐無稽な理屈に読む者は思わず笑いを誘われる。しかし，よく考えてみれば，「夫婦」は中国語では「fūfù」と発音され，イントネーションが日本語と異なり，猫の鳴き声の擬音語「フーフー」を連想することは難しいだろう。そのため，振り仮名を振って提示しないと笑話の意味が理解できない。川上陽介は，和刻本三種『笑府』や『訳解笑林広記』などの笑話集には，中国語の音を利用した笑話が多く収録されていると指摘している[29]。本書の著者も同様に，日本語の音を利用して漢文体笑話を創作したものと思われる。このことが読者を主に日本人に想定して作っていることを示している。また，「声を聞いて物を聞き分ける」という物語の構造について，作者は鳥の言葉を知って潔白を証明した公冶長[30]や，鳥獣の言葉で奇怪な事件を裁く東方朔[31]の説話をわざわざ引き合いに出して，滑稽味を増幅させている。作者は笑話の後ろに付けた評の下線部（イ）で，猫の声で両者の関係を判断する傍人が，公冶長と東方朔の才能を兼ね備えた人物であると言えるが，姓氏を失念したとからかっている。この評語の前後で生まれる大きな齟齬が読者を笑わせるのである。なお，本話と同じように，本書には擬音語を笑い種にするのは第三十三話「地蔵」がある。田舎の婆が厠の後を地藏堂に，屁を放る音「ふうふう」を地蔵の話「佛佛」に誤解することによる笑い種である。

もうひとつ，日本語のダジャレを利用した笑話を見てみよう。

或ト問二テ窮理先-生一ニ曰ク，五-大-洲之ノ外，南-北ノ之隅，有二リ渾（コン）-沌（トン）未（/ ル）タ闢ケ之地一ト云フ。不レス知ラ，若クノ如キ處ロハ，則動-物（/ イキモノ）ノ之類（イ），雖二トモ細禽（/ コトリ）小-獣（/ ケモノ）一ト，未二タ曾産出一焉カ-邪。先-生曰ク，顧フニ至レテハ如二キニ水虎（/ カツハ）一ノ，則チ決シテ無レシ有二ルヲ可レキ生レス焉ニノ之理一。其ノ他ハ我レ未（/ ザル）二ダ之知一ラ也リ。或ハ曰ク，何ヲ以テ知レルヲ之ヲ。曰ク，無レ他，窮-理ノ之未（/ ル）レタ届ラ處（トコロ）々。〔窮理，胡瓜音訓近。〕

『文明笑話』・第二十二話・窮理

29　川上陽介（2017）「遠山荷塘施訓『訳解笑林広記』小考」国語国文 / 京都大学文学部国語学国文学研究室編86（5），p466–480。

30　日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典第二版』（第五巻）小学館，p460。【公冶長】中国，春秋時代の斉の人。一説に魯の人とも。字は子長（子芝とも）。孔子の門人で，女婿。よく鳥の語を理解したという。

31　同上（第九巻），p1044。【東方朔】中国，前漢の文人。字は曼倩。平原厭次（山東省恵民県）の人。諧謔，風刺の才にすぐれ武帝に寵愛された。西王母の仙桃を盗んで食べた話など数々の逸話で知られる。著に「東方先生集」がある。

窮理先生と質問者の対話の中に面白いダジャレがある。「窮理」と「胡瓜」の音読みはいずれも「きゅうり」である。質問者が窮理先生に，未開の地には空飛ぶ動物はいないのかと尋ねると，窮理先生は，河童だけは存在しないことは確かだと答える。その理由を問われると，「窮理（胡瓜）がまだないところであるから」水虎がいないのは確実であると言う。「窮理」＝自然科学で説明ができないという意味と同音の胡瓜がいきわたっていない（故に河童が存在しない）」ことを引っかけて，読者を笑いを誘う。「水虎」の左訓は「河童（カツハ）」である。日本の伝説では，河童は胡瓜を好んで食べる。調和によるダジャレは，言葉に面白みを加える。しかし，「窮理」と「胡瓜」の読みが全く一致していることや，河童が胡瓜を好んで食べるという文化的な背景を理解せずに，この笑話がいかに面白いかを理解するのは難しいだろう。さらに，本書に登場するダジャレを用いた笑話はたいてい日本語の音に焦点を当てている。中国語では，「窮理（qiónglǐ）」と「胡瓜（húguā）」の発音は全く異なるので，ダジャレによる面白さは形成されず，笑話の真意を理解することは難しい。本話と同じように，第二十七話「濟度」の［衆娘（しゅじょう）と衆生（しゅじょう）］，第二十八話「蒸餅」の［已（のみ）と之核（のみ）］，第三十五話「攝鬚」［『東鑑』（あずまかがみ）と鏡（かがみ）］はいずれも「音訓相似」を利用した笑話である。

本書には日本語の特徴を利用した言語遊戯だけではなく，日本文化を反映した独自の話もある。次の一例を見てみよう。

> 有二リ欲レスル租レント屋（/イヘヲカル）ヲ者一ノ，或ト謂テ曰ク，某レノ坊ニ有二リ一屋（イツオク）（/イヘ）一，戸-面ニ題タイ二ス賃房（チンバウ）（/カシグナ）牓（/ハリブタ）一ヲ，子其レ租（カラ）レハ之ヲ，何-如。曰ク，**<u>（ア）結-構幾-分（/ナニホドノカマヘソ）</u>**ソ。曰ク，第聞（タヾキク），**<u>（イ）十分</u>**也。其ノ人ト喜ヒ往キテ視レレハ之ヲ，則チ敝-壞（/ヤブレイヘ）不レ蔽二ハ風-雨（/アメカセシノカレス）一ヲ，佛-然（フツ）トシテ歸テ謂（イツ）テ曰ク，那ノ屋（/カノイヘ）敝-壞如レシ是ノ，子何ヲ以テ反ツテ説二ク十分一ト。曰ク，問二ヘハ之レカ租-金一ヲ，則チ二-両（/ニリヤウ）半（/ニブ）ノミ，是豈不二亦タ十分一ラヤ邪。
>
> 『文明笑話』・第十話・租房

賃貸情報を提供する側と借りる側との対話を通じて，相互の認識の食い違いをユーモラスに描いている。この笑話は，下線部（ア）「結構幾分（/何ほどの構えぞ）」と（イ）「十分」という意味上のあいまいさを利用し，読者に対話の中で思いがけず登場人物の誤解を発見させ，意外性と滑稽さをもたらしている。（ア）には，借主が家の構造を尋ねる意味があるが，家賃を尋ねる意味もある。同様に賃貸情報を提供する側の「十分」という答えにも二つの意味があり，その家が完璧であることを意味するほかに，「十分（じゅうぶ）」という意味がある。そのため，借り手は大喜びで家を見に行ったが，雨風をしのげない老朽化した家を見てがっかりした。そして，賃貸情報を提供してくれた人に，なぜその家が住むのに十分であると言ったのか尋ねたところ，その人は賃借人が家賃について尋ねているのだと勘違いしていたことが判明し，「二両半」，つまり「十分（じゅうぶ）」と答えていたのである。これで両者の誤解は解けた。しかし，なぜ家賃「二両半」が「十分」になるのか，この笑話を理解するためには，江戸時代の貨幣制度である四進法（1両＝4分（ぶ）＝16朱＝4000文）をよく知る必要がある。本書には，房州漁師のあばら骨が一本足

りない気質（第四話「鑽燧」），郷土の美と琵琶湖の大と自慢する近江人のイメージ（第十五話「巨瘤」）や歳暮を題にした句を詠む俳諧師（第十九話「歳莫」）など日本の制度，風俗や文化などを反映する独自の話も多くある。

本書には文明開化ならではの風物詩を題材にしたさまざまなジャンルの笑話を収録しているのも特徴的である。

> 蒸氣-車(/ヲカジヨウキ)-中有二**(ア)窮-理生**一，靠レ^リテ^橙(/コシカケ)^ニ遠-望^ス。海-水山-岳旋^テ如レ^シ飛^フカ，而^シテ車^マ不^ス レ覺レ^ヘ行^ヲ。生見レ^テ之，忽^チ悟^リテ而歎^シテ曰^ク，吾^レ今^ニ而^シテ始^テ知二^レリ**(イ)地球運轉(/メグル)之説**不レ^ヲ誣(/ウソ)^ナラ矣。
>
> 『文明笑話』・第三十一話・地球

「窮理」とは江戸後期から明治にかけて，広義には自然科学，洋学全般を指し，狭義には物理学を指した言葉である。下線部（ア）「窮理生」とは西洋科学や物理学などを学ぶ学生を指す。本話は，物理を学ぶ窮理生が「相対性原理」と下線部（イ）「地球の自転」との概念を混同したところから来る笑いを狙ったものである。蒸気機関車に乗り，車窓から飛ぶように回転している海水と山岳の景色を遠望しているのは，景色が流れゆくのは蒸気機関車が動いているのではなく，地球が回転しているからだと窮理生の馬鹿げた理解を示した。本書の笑話には，人力車と車夫を要素とした，第六話「糊口」（艶笑話），第二十話「偶載」（状況愚人譚），地理学を要素とした第十四話「皮厚」（巧智譚）など，文明開化の事象を反映する笑話が多数ある。これは本書と江戸期の漢文体笑話集とで最も異なる点であるといえよう。

5. おわりに

以上，明治期の漢文体笑話集『文明笑話』における四十七話と中日の先行笑話集との影響関係，評語「諧史氏曰」及び中日それぞれの文化的な要素の機能を，笑話の出典と創作の特徴の二つの側面から比較検討した。本書の笑話は中日の先行笑話集の影響を受けている。『笑府』『笑林広記』『東坡志林』と『五雑組』など中国の古典籍・先行笑話集の笑話を翻案・改作するほか，「浪人」「十文字」など江戸小咄を翻案・漢訳し，さらに『訳準笑話』第二話といった日本の先行の漢文体笑話も改作しているということが明らかになった。

次に，本書の評語「諧史氏曰」は中国古典の評語を模倣しながら，中国笑話，近世日本の笑話の伝統を引き継ぎ，笑話の内容を受けてあるいは知らん振りあるいは主人公を持ち上げて結果として主人公を嘲笑し，笑いを増幅させる機能を果たしていた。また，附表のように，本書の四十七話には，巧智譚（二十話），愚人譚（三話）と状況愚人譚（十三話）を中心に，性癖譚（六話），誇張譚（四話）と雑（艶笑話一話）も取り入れている。本書の作者は，人間の知恵を利用した巧智譚と人間の欠点を利用した愚人譚（状況愚人譚を含めて合計十六話）という笑話の基本形を中心に，笑話の幅を意識しながら，バランスのとれた内容の笑話集を構成していた。

本書では，中日の文化的な要素及び明治維新による時代特有の新たな要素が，それぞれ笑話の中で相応の役割を果たしている。「登徒子」「北里」「瘦馬」や『論語』『三国志』の名句など日本の読者に古くから熟知された中国的要素が常に物語の背景を構築するために使われてい

る。これに対し「衆娘と衆生」や「窮理と胡瓜」といった和語の言語遊戯,「千手観音（俗語）」や「鼻毛が長い（諺）」の活用など日本的要素が常に笑話の核となるオチに決定的な役割を果たしていた。また，社会の変動期に出版された本書は,「人力車」「窮理」など文明開化を象徴する話柄を笑話に盛り込み，当世らしい笑話を創作して漢文笑話の境を拡げているのである。本書は近世日本における漢文体笑話集の創作特徴を継承・発展させていると言えるだろう。

参考文献

日本語文献

安楽庵策伝著・鈴木棠三訳（1989）『醒睡笑：戦国の笑話』平凡社
石崎又造（1940）『近世日本に於ける支那俗語文学史』弘文堂
磯部祐子（2010）「漢文笑話『訳準開口新語』について」富山大学人文学部紀要，53号, p77–101
川上陽介（2017）「遠山荷塘施訓『訳解笑林広記』小考」国語国文 / 京都大学文学部国語学国文学研究室編86（5），p466–480
北佐久郡志編纂会編（1957）『北佐久郡志第四巻（研究調査篇）』北佐久郡志編纂会
皓星社編集部（2017）『新修隠語大辞典』皓星社
田中寛子（2013）「虱と千手観音：『梁塵秘抄』三四六歌，四一〇歌の関連をめぐって」日本歌謡研究53（0），p99–114
日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部（2001）『日本国語大辞典第二版』小学館
浜田義一郎・武藤禎夫編（1971）『日本小咄集成』筑摩書房
松枝茂夫・武藤禎夫編訳（1964）『中国笑話選：江戸小咄との交わり』平凡社
武藤禎夫（1979）『噺本大系』東京堂出版
武藤禎夫訳（1981）『昨日は今日の物語：近世笑話の祖』平凡社
武藤禎夫（1996）『江戸小咄類話事典』東京堂出版
安岡昭男（2010）『幕末維新大人名事典』新人物往来社

中国語文献

王三慶（2003）『日本漢文小説叢刊』台湾学生書局
王貞珉・王利器（1985）『歴代笑話集續編』春風文藝出版社
王利器（1956）『歴代笑話集』上海古籍出版社
何暁毅（2017）「『登徒子好色賦』在日本的流行及影響」長江大学学報（社会科学版）巻40，2号，p21–26
周作人（1933）『苦茶庵笑話選』北新書局
孫虎堂（2010）『日本漢文小説研究』上海古籍出版社
陳清俊（2010）『中国古代笑話研究』花木蘭文化出版社
林淑貞（2015）『中国笑話讀本』五南出版社

附表　『文明笑話』と他の作品と関係一覧

番号	笑話題	中日の古典籍・諺などの引用	原話・類話	類型	笑いの質
一	吃醋※	【中・人物】 ①冶長の口 ②東方生の言	【中・類話（同想）】 「動物の声を聞いて物を聞き分ける」説話 ①公冶長（よく鳥の言葉を理解した説話） ②東方朔（鳥と獣の語で判決を下す説話）	巧智譚 （類似音の頓智）	言葉遊戯・擬音語 「猫の鳴き声（フーフー）は夫婦夫婦（ふうふふうふ）の音と類似する」
二	左手	【中・古典籍】 ①『詩経』「小雅・棠棣」「兄弟鬩于牆，外禦其務」 ②『三国志』「魏志・王脩伝」「夫兄弟者，左右手也」 ③蕉葉（底の浅い杯） 【日・俗語】 ①左利き＝上戸＝酒飲み ②下戸（酒の飲めない人）	なし	巧智譚 （同音の頓智）	言葉遊戯・ダジャレ 「左利き＝上戸＝酒飲み」
三	砕窖	なし	【中・原話】 『笑府』（明・馮夢龍）・閨語部・売鍋 【日・原話の翻案】 ①『訳準開口新語』（岡白駒）・第七十話・寛延四 ②『気のくすり』・鍋屋・安永八 ③『解頤譚』・売鍋・文化十	巧智譚 （皮肉を言う）	商人の不幸を喜ぶ買い手
四	鑽燧	【日・風俗】 ①房州漁人と漁舟 ②錐揉みして火を取る	なし	性癖譚 （自慢）	ほらを吹く房州漁師
五	領蝨	【日・俗語】 千手觀音＝虱	【日・類話】 『醒睡笑』（安楽庵策伝）・巻の一・鈍副子・第十話（塔頭）・元和九 【中・類話】 『笑倒』（清・陳皋謨）・虱子	状況愚人譚 （うかと言う）	俗語「千手觀音＝虱」
六	糊口	【日・文明開化】 人力車夫	なし	雑 （艶笑話）	女性器を臍の下の口に，男性器を三番目の達者な足に擬える人力車夫
七	踏物	なし	【日・類話】 『訳準笑話』（村田匏庵）・第二十四話（夜行踏物）・文政九	状況愚人譚 （勘ちがい）	暗闇で物事の相違をを識別できない愚かな夫

八	更名	なし	【日・類話】 「家の召使いに銭の名を付けて呼ぶ主」 『醒睡笑』（安楽庵策伝）・巻の六・推は違ふた・第十九話（知音）・元和九	巧智譚 （巧みな方法）	支払い上手の家僮
九	饒舌	【日・諺】 口が酸っぱくなる 【日・食べ物】 蒲焼き	なし	巧智譚 （皮肉を言う）	言葉遊戯・ダジャレ「口が酸っぱくなるほど言っているから，蒲焼きを食べる暇がない」
十	租房	【日・貨幣制度】 四進法「1両＝4分（ぶ）＝16朱＝4000文」	なし	状況愚人譚 （勘違い）	相手の言葉の意味を誤解する。「結構幾分」と「十分」には二重の意味がある。
十一	瘦馬	【中・古典籍】 ①『北里志』（唐・孫棨）「北里」 ②『五雑組』（明・謝肇淛）「人部四」「瘦馬」	なし	巧智譚 （皮肉を言う）	好色でどうしても悔い改めない放蕩息子は，『五雑組』に記録された「瘦馬を買う」という風潮と類似している。
十二	禳蛆	【日・枕詞】 千早振る（勢いが激しい意で，「神」にかかる）	なし	愚人譚 （文字知らず）	無筆な主人と文盲の蛆
十三	叱詫※	【中・古典籍】 『論語』「子路」「父為子隠，子為父隠。（父は子の為に隠し，子は父の為に隠す。）」	【中・類話】 ①『笑府』（明・馮夢龍）・謬誤部・劈柴 ②『精選雅笑』（明・醉月子）・劈柴 ③『笑得好』（清・石成金）初集・抬枝柴 ④『笑林広記』（清・遊戯主人）・殊稟部・劈柴 【日・類話の翻案】 『太郎花』・喧嘩・寛政三	性癖譚 （癖）	血は争えない
十四	皮厚	【日・文明開化】 地球の厚さ（地理学）	なし	巧智譚 （やりこめる）	地球よりも厚い顔
十五	巨瘤	【日・風土】 ①近江人，郷土と琵琶湖	なし	性癖譚 （自慢）	親父の巨大な瘤を自慢する息子
十六	割道	【日・風俗】 ①切腹で借金取りを脅かす侍 ②腹に墨で十字を切る	【日・類話】 ①『軽口浮瓢箪』・十文字の墨打・寛延四 ②『坐笑産』・浪人・安永二 ③『高笑い』・息子・安永五	巧智譚 （巧みな方法）	借金取撃退法

十七	鼻毛	【中・古典籍】 『登徒子好色賦』（戦国時代・楚・宋玉） 【日・諺】 鼻毛が長い	なし	巧智譚（はぐらかす）	言葉遊戯・ダジャレ「鼻毛が長い」
十八	唖愚	なし	【中・類話（同想）】 『笑林広記』（清・遊戯主人）・譏刺部・有銭誇口	巧智譚（やりこめる）	言い掛かり撃退
十九	歳莫	【日・風俗】 俳歌師と歳暮の吟句	なし	状況愚人譚（勘違い）	夫の言葉の意味を誤解する妻
二十	偶載	【日・文明開化】 人力車と輓夫	なし	状況愚人譚（勘違い）	乗客の善がり声を人力車の軋る音に誤解する仲間
二十一	往處	なし	なし	性癖譚（物忘れ）	物忘れの主人公の苦しい言い訳
二十二	窮理	【中・説話】 ①盤古が天地を開く ②水虎 【日・説話】 河童 【日・文明開化】 窮理先生	なし	巧智譚（同音の頓智）	言葉遊戯・ダジャレ「窮理（きゅうり）」と「胡瓜（きゅうり）」音訓相似
二十三	屎婦	なし	なし	巧智譚（やりこめる）	糞を妻の汚い顔に喩える夫の反撃
二十四	開化	なし	なし	巧智譚（皮肉を言う）	「ただ食いただ飲み」を文明開化とした主人
二十五	河豚	なし	【日・原話】 ①『落咄臍くり金』・鰒汁・享和二 ②『太郎花』・鰒汁・寛政三 【中・類話】 『子不語』（清・袁枚）・十二巻・誤嘗糞	状況愚人譚（計略外れ）	策士策に溺れる
二十六	嗜睡	なし	なし	巧智譚（やりこめる）	議論をして眇めの婦の説を破る人
二十七	済度※	なし	なし	巧智譚（同音の頓智）	言葉遊戯・ダジャレ「衆娘（しゅじょう）」と「衆生（しゅじょう）」音訓相似

二十八	蒸餅	【日・文明開化】 パン	【日・類話】 ①『醒睡笑』（安楽庵策伝）・巻の六・児の噂・第六話（餅に核がある） ②『昨日は今日の物語』・上巻・餅の核	状況愚人譚（勘ちがい）	言葉遊戯・ダジャレ「而已（ノミ）」と「之核（ノミ）」音訓相似
二十九	児夢	【中・古典籍】 ①『北里志』（唐・孫棨）「北里」 ②狭斜（遊里）	なし	性癖譚（吝い）	遊女に金を使う夢さえ見る息子を心配するけちな父
三十	寡婦	なし	なし	巧智譚（やりこめる）	寡婦の詭弁
三十一	地球	【日・文明開化】 ①窮理生 ②地球運転の説	なし	愚人譚（物理しらず）	地球運転の説を誤解する窮理生
三十二	牝馬	なし	なし	巧智譚（はぐらかす）	話の焦点は「牝馬を御する」から「妾を買う」へと移った。
三十三	地蔵	なし	なし	状況愚人譚（勘違い）	言葉遊戯・擬音語 放屁する音を仏の言葉「佛佛（フーフー）」に誤解する婆
三十四	四脚	なし	【中・原話】 『笑林広記』（清・遊戯主人）・殊稟部・鋪兵	状況愚人譚（変な応用）	家僮の役立たぬ行動
三十五	鑷鬚	【日・古典籍】 ①鎌倉の歴史 ②朝夷奈切通 ③『吾妻鏡』 ④朝比奈御髭之塵	なし	状況愚人譚（早合点）	言葉遊戯・ダジャレ「『東鑑』（あずまかがみ）」と「鏡（かがみ）」音訓相似
三十六	盗犬	【中・人物】 堯（中国，古代伝説中の帝王）	なし	誇張譚（動物）	言い掛かり撃退
三十七	禁方	【中・風俗】 禁方（秘密の方術・薬の処方）	【中・類話（同想）】 『東坡志林』（北宋・蘇軾）・第二巻・道釋・記道人戯語	巧智譚（巧みな方法）	商人の下らぬ考え
三十八	技術	なし	なし	状況愚人譚（奇抜な論理）	箸を使わずに手づかみで食べる方法を妙技と呼ぶ愚かな男

三十九	手足	なし	【中・原話】 ①『笑府』(明・馮夢龍)・閨語部・口脚爭 ②『広笑府』(同上)・口脚之爭 【日・原話の翻案】 『楽牽頭』・手足の論・明和九	誇張譚 (人間)	「目には目，歯には歯」議論をして手の説を破る足
四十	蘘荷	【日・俗説】 茗荷を多く食べると物忘れする	【日・類話】 「茗荷」に関する民話・笑話が非常に多い。例えば，民話「茗荷女房」，笑話『醒睡笑』「巻の六・無題」や『聞上手二編』「茗荷宿」など	状況愚人譚 (あて外れ)	策士策に溺れる
四十一	瞽人	【中・古典籍】 『関尹子』(周・関尹子)「三極」「螂蛆食蛇，蛇食蛙，蛙食螂蛆，互相食也」 【日・諺】 盲蛇に怖じず	【日・類話】 「三竦み」に関する民話が多い	巧智譚 (同音の頓智)	言葉遊戯・ダジャレ 「盲蛇に怖じず」
四十二	水月	【中・古典籍】 『僧祇律』(東晋・摩訶僧祇律)「猿猴捉月」	なし	誇張譚 (動物)	言葉遊戯・俚曲 「手と手と手で，手と手と手で」
四十三	梅樹	【中・古典籍】 『種樹郭橐駝伝』(唐・柳宗元)「橐駝」	なし	誇張譚 (植物)	策士策に溺れる
四十四	問歌	【日・古典籍】 ①『百人一首』 ②天智天皇 ③菅家 ④僧正遍照	【日・類話(同想)】 『訳準笑話』(村田匏庵)・第二話	愚人譚 (言葉しらず)	知ったか振り
四十五	何牌	なし	なし	性癖譚 (怠け者)	時間の流れを感じない無精者
四十六	成長	【中・古典籍】 ①高誼(目上の人から受ける好意) ②偉丈夫(立派な男) 【日・呼称】 長松児(目下・下人の呼称)	なし	状況愚人譚 (熱中興奮しての没論理な言行)	老人の不思議な行動
四十七	同載	【日・文明開化】 人力車	なし	巧智譚 (巧みな方法)	支払い上手の乗客

笑話題の後の※は「諧史氏曰」という書き出しの評語があるものを示す。